（第3回）

中

2023

国語

始める前に左の注意事項を読みなさい。

○始めの合図があるまで開いてはいけません。
○問題は全部で23ページあります。
○答えはすべて解答用紙に書きなさい。
○問題冊子、解答用紙のいずれにも受験番号、氏名を書きなさい。
○質問のあるときは静かに手をあげ先生の指示を待ちなさい。
○終わりの合図があったら、ただちに筆記用具を置きなさい。
○問題冊子を持ち帰ってはいけません。

受験番号
氏　　名
ふりがな

一　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

時田秀美は、この学校に転校してきた小学六年生だが、担任の奥村とクラスメイトになじめず、ひと月以上になる。母の時田仁子は女手一つで秀美を育ててきた。しかし、仁子も担任の奥村と考え方が合わない。秀美は、学校生活を送る中、算数で三角定規と分度器が必要になり、母の仁子に購入してもらった。

秀美は、三角定規で平行線を引いたり、分度器で角度を計ったりするのが、すっかり好きになった。新しい文房具は、いつも、子供たちに、学習意欲を湧(わ)かせる。コンパスで定規に自分の名前を彫り、そこにクレパスの色を入れる方法を得意気に①披露(ひろう)している子供もいて、その日一日、教室は、にぎやかだった。

秀美は、ふと、隣の席の赤間ひろ子が、三角定規を手にしていないことに気付いた。

「赤間さん、定規は？」

ひろ子は、ぎこちなく笑いながら答えた。

「忘れちゃったの。ちゃんと、机の上に置いといたのに、馬鹿みたい」

「ふうん。じゃ、使う時、ぼくの貸してあげるよ」

「いいよ、別に」

秀美は、肩をすくめた。せっかく貸してあげようとしてるのになんて奴だ、と彼は思い不愉快になった。皆、ぼくのことをへそ曲りとか何とか言っているみたいだけど、余程、こいつの方が、へそ曲がってる、と、彼は心の中で呟(つぶや)いた。赤間ひろ子は、下を向いて怒ったような表情を浮かべていた。

算数の時間、最初の挨拶(あいさつ)が終わると、奥村は、定規と分度器を出すように言った。教室じゅうがざわめいていた。

そして、それに紛れるように、奥村が、赤間ひろ子の席に近付いた。彼は、自分のポケットから、小さな包みを出して、ひろ子の机の上に置いた。ひろ子は、頬を真っ赤に染めて、奥村を見た。

「赤間は、これを使いなさい」

秀美は、その言葉の意味が呑み込めずに、隠れて行なわれた②二人のやり取りを横目で見ていた。

「こら、時田、何、よそ見してる」

秀美は、うんざりしたように、前を見詰めた。教壇に立っている奥村は、いつもの憎々しい表情を浮かべ授業を始めた。

何か、変だ。秀美は、一瞬、教室の空気が、動きを止めたように感じたのだった。彼は、自分の周囲をきょろきょろと見渡した。そして、ある事に気付いて、ぎょっとしたのだった。子供たちは、皆、奥村と赤間ひろ子のやり取りを見ていたのだ。それも、はしゃいで雑音を作り、見ていないという※1アリバイを作りながら、視線をひろ子の席に動かしていたのだ。

実は、秀美には、最初から不思議に思っていたことがあった。その疑問が、自分のみに湧いて来るのだと確信していたので、口に出すこともなかったのだ。謎が解けた。秀美は、気付いて③愕然とした。

赤間ひろ子は、いつも給食が終わる頃に、立ち上がって、こう言った。

「パン残した人は、受け付けまーす。あたしんちのお庭に来る鳥さんたちの餌に、ご協力お願いしまーす」

皆、給食の食器を戻す前に、ひろ子の席に来て、残したパンを置いて行くのだった。あっと言う間に、ひろ子の机の上は、パンの山になった。秀美は、それを横目で見ながら、鳥の餌にするくらいなら、自分で食った方がましだと思っていた。第一、他人より食欲の旺盛な彼は、給食のパン一個では、とても放課後まで持ちこたえられそうになかった。愛鳥週間でもあるまいし。秀美は、そう思い、ひろ子の机の上の大量のパンを恨めし気に見た。

彼女は、あらかじめ用意してあった紙袋に、丁寧にそのパンを入れていた。

しかし、あんなに沢山のパン。しかも毎日だ。いったい、ひろ子の家の庭には、どれだけ沢山の鳥がやって来ると言うのだろう。秀美は、（　1　）でならなかった。

「ありがと、助かっちゃう。うちに来る鳥さんたち、すごく食べるんだよ」

ひろ子は、パンを置いて行く子供たちに、そんなふうに礼を言っていた。ほんとに、鳥の餌付けって大変、とでも言うように、肩をすくめながら、袋の口を慎重に折り曲げていたひろ子。

秀美は、思わず片手で自分の額を軽くぶった。自分を間抜けだと心から反省した。あのパンは、鳥の餌などではなかったのだ。彼女の家の貴重な食料だったのだ。定規を買えない程の貧しい家庭があることなど、彼には、それまで予想もつかなかった。自分の家の家計がかなり苦しいということは知っている。《　A　》、それは、生活費に事欠くという種類のものでは、決してない。笑いとばせる程度のものだ。しかし、赤間ひろ子の家は、冗談の入る余地などないものだ。あの嫌味な奥村でさえ、こっそりと、ひろ子のために定規を渡さなくてはならない程、彼女の家は困窮しているのだ。口に出せない程の貧しさが、あったなんて。

それ以上に、秀美の心に衝撃を与えたのは、そのことをクラス全員が知っていたことだ。鳥の餌だというひろ子の嘘を、④黙認していたということだ。皆、共犯で、秀美だけが、仲間外れにされていたのだ。彼は、唇を噛み締めた。誰を責めるのでもなく、自分を殴ってしまいたい思いに駆られて、算数の授業どころではなかった。

「三角形を各自で書いてごらん」

奥村の声が、はるかかなたで聞こえているような気がした。

「そして、三つの角を分度器で計ってごらん」

秀美は、机に肘をつき、両手で顔を覆いながら、指の隙間をこっそりと開け、ひろ子を盗み見た。

「ほうら、すごいだろう。どの三角形も三つの角を足すと百八十度になる」

ひろ子は、感動したような表情を浮かべていた。どうして、⑤そんなことに感動出来るんだ。秀美は自分の心が苛立つのを感じた。

あちこちから、どうしてなんだろうという素朴な驚きの声が洩(も)れていた。奥村は、秀美に目をやり、そのまま首を横に振りながら無視した。おおかた、あの学のある母親が、知ったかぶりをして教えてしまったのだろう。本当に、親が親なら、子供も子供だ。

やがて、給食の時間が来た。いつもなら、真っ先に献立を調べに行く秀美だったが、今日は気分が重かった。しかし、食べ始めると、急に体は空腹を訴え始め、彼は、貪(むさぼ)るように、食べ物を口に運んだ。

ふと、パンをちぎる手が止まった。秀美は、そっと、ひろ子を見た。彼女は、行儀良くスープを啜(すす)っていた。彼は、それ以上、パンを食べるのを止めた。

食事が終わると、いつものように、ひろ子は、大きな声で言った。

「パンを残した人、うちの庭にやって来る鳥さんたちのために協力してね」

皆、例のごとく、残ったパンを、ひろ子の机の上に載せて行った。机の上に、パンの山が出来、ひろ子は、皆に、お礼を言いながら、持参した紙袋に、それを入れた。

「あの、赤間さん」

秀美は、おそるおそる彼女に声をかけた。ひろ子は、※2怪訝(けげん)そうな表情を浮かべ、何の用かと目で問いかけた。

「これ、ぼくも、残しちゃったんで、きみんちの鳥に……」

秀美は、半分程残したパンを、ひろ子に差し出した。見る間に、ひろ子の顔が赤くなり、目は、恐怖を感じたかのように見開かれた。ひろ子は、ゆっくりと、秀美に向かって手を出したが、それは震えていた。秀美は、一

刻も早くパンから手を離したいというように、彼女にパンを握らせた。しばらくの間、そのパンは、彼女の手の内にあった。秀美は、ほっとして、自分の食器を片付けようと立ち上がった。その瞬間である。ひろ子が、そのパンを秀美に投げつけたのは。

秀美は、最初、いったい何が起こったのか、まったく理解出来なかった。しかし、床に落ちてつぶれたパンを目にした途端、自分が、⑥とんでもないことをしてしまったことに気付いた。慌てて、ひろ子の顔を見ると、彼女は、目に涙をなみなみとたたえ、秀美をにらみつけていた。

「ごめん……ぼく……」

ひろ子は、机につっ伏して大声で泣き始めた。秀美は、言葉を失って、床に落ちたパンを拾った。つぶれたパンには、ひろ子の指の跡が、くっきりと付き、彼女の気持を物語っていた。

秀美は、自分の背後から、音のない溜息が押し寄せて来るように感じて、思わず後ろを振り返った。そこには、いくつもの彼をとがめる目があった。彼は、パンを手にしたまま、非難の視線を受け止めた。子供たちは、無言で秀美をののしり、そうすることで、ようやく、彼をこの教室の仲間として受け入れたのであった。

秀美は、それまで味わったことのない感情を抱えて帰宅した。隆一郎は、モーツァルトを聴きながら釣竿を磨いていたが、秀美の様子を見るなり、それを止めた。

「どうした。学校で、御不幸でもあったかな？」

秀美は、隆一郎の側に駆け寄り、畳に伏して泣き始めた。なんだか、ひどく悲しかった。同時に、いくらでも涙を流せるこの場所が、とても心地良く感じられた。

「ぼく、ひどいことしちゃったのかなあ？」

秀美は、隆一郎に、事の⑦顚末を話した。その間じゅう隆一郎は、秀美の頭を撫でていた。

「だから言っただろうが。おまえのやり方にも、ちいっとばかし、問題があるって」
「だけど、ぼく、赤間さんを心配したんだ。皆のするように、あの子の手助けをしようとしただけなんだ。昨日、おじいちゃんの言ってた同情ってことじゃないよ。本当に、そうしなければって気持になったんだ。」
「ふむ」
隆一郎は、再び釣竿を点検し始めた。
「プライドって言葉は知ってるだろう？」
「うん」
「おまえは、赤間さんって子のプライドを粉々にしちゃったんだなあ。誰もが、その子に同情してた。でも、おまえは、それに気付かなかった。それで、その子の気持が、どれだけ救われていたことか。そして、⑧他の子たちが、おまえに、それを教えないことで、どれだけ、赤間さんを助けていたことか。でも、自分で、気付いちゃったんだなあ」
秀美は、涙を拭(ふ)きながら起き上がった。
「でも、そんなつもりじゃなかったんだよ。赤間さんのプライドをつぶそうなんて、思いもよらなかったんだよ」
「そんなつもりじゃないのが一番悪い」
隆一郎は、不貞腐(ふてくさ)れたように足を投げ出す秀美を、おもしろそうに見詰めた。
「悪意を持つのは、その悪意を自覚したからだ。それは、自覚して、失くすことも出来る。けどね、そんなつもりでなくやってしまうのは、鈍感だということだよ。賢くなかったな、今回は。おじいちゃんの言ってること解るか」
秀美は、負けを認めたかのように頷(うなず)いた。

「ぼく、自己嫌悪になっちゃうよ」
「ほお。そんな言葉、どこで覚えて来た」
「ぼくが作ったんだよ」
「嘘をつけ」
障子が、音もなく開けられ、仁子の顔が覗いた。
「何よ、二人で。また、悪い相談してたんでしょう」
「今日は早いな」
「これから、お出掛け。ね、遅くなると思うから、お父さん、お夕食、お願い！　あれ？　秀美、泣いてんの？　どうしたの？」
秀美は、恥しそうに、母親から顔をそむけた。隆一郎は、笑いながら、仁子に耳打ちをした。
「自己嫌悪に陥ってるらしいぞ」
仁子は、呆れたように、拗ねた様子の息子を見詰めた。
「その年齢で自己嫌悪だなんて、なかなかまともじゃないの」
「うるさい！　母さんなんかあっちに行け」
「ふん、親にそんな口きくと、ますます自己嫌悪に陥るわよ」
仁子は、そう言い残すと、音を立てて障子を閉めた。秀美は伏せて畳に頬を押し付けたまま動かなかった。涙は流れ続けていたが、もう、泣きたい欲望は失せていた。畳の匂いは、彼の心を安らがせた。さっきまで感じていたのが（　2　）という心の動きだとすると、それは、ある意味では心地良いものかもしれないと、彼は感じていた。濡れた頬に当たる畳の目は、どこまでも続くように思えたし、その行き着く先では、祖父の胡坐が感情を受け止めてくれるのを彼は知っていた。愛情という言葉を彼は、まだ知らなかったが、安心して自分自身を憎

めると思えるのは、【　　X　　】と気付いていた。

「おじいちゃん」秀美は、起き上がり、もじもじした。

「何だ」

「明日から、ぼく、赤間さんに対して、どうしたらいいのかなあ。謝れば謝る程、あの人やな気持になるんでしょ」

「普通にしてりゃいいんじゃないか。おまえに出来ることなんぞ何もないぞ」

「でも、励ましたりとかさ」

「自惚れるんじゃない」

隆一郎は、秀美を横目で見ながら、釣竿を片付け始めた。

翌日、秀美が登校すると、赤間ひろ子は、既に席に着いて漢字の書き取りをしていた。彼のおはようという挨拶に、ひろ子は顔を上げ、昨日のことなど忘れたように微笑みを浮かべて、同じ言葉を返した。

「時田、漢字の練習して来たか？」

後ろの席の宮田という少年が秀美に尋ねた。

「漢字の練習って？」

「知らねえの？　今日、テストあるんだぜ。ドリルの五ページ目まで練習して来いって、奥村先生言ってたじゃん」

そういえば、そんなことを帰り際に聞いたような気がする。秀美は、思い出しながら舌打ちをした。

「仕様がねえなあ。ドリルを開いてみなよ。おれが出そうな漢字教えてやるよ」

秀美は、不審そうな表情で宮田を見詰め、後ろ向きに椅子に腰を降ろした。⑨彼が話しかけてくるのは初めてのことだった。

「これとこれが間違いやすいから、出るらしいぜ」

「なんで？」
「昨日、塾の先生が言ってたんだもん」
「そうじゃなくて、なんで、ぼくに教えてくれるの？」
宮田は、不思議そうに秀美を見た。
「変な奴だなあ、相変わらず。前の席に座ってるからだろ。助けてやったっていいじゃん。違う？」
「う、うん」
秀美は、登校し、昇降口で靴を脱いだ瞬間から、自分を包んでいる奇妙な空気に気付いていた。何か真新しいものが自分に向かって押し寄せているように感じたのだ。たとえば、冬の終わりに吹いた一瞬の風で、春の訪れを悟ってしまうように、【　　Y　　】
秀美は、宮田と向き合い、漢字の練習をしながら、何度か顔を上げて、彼の顔を盗み見た。そして、ついでに、教室を見渡した。秀美は、自分の肩の上に載っていた重苦しいものが急速に取り除かれて行くのを感じていた。誰も、秀美を見ていなかった。けれども、誰も、彼を無視していなかったのである。子供たちは、秀美の知らないところで、彼の受け入れ態勢を整え、今日の朝を迎えたのであった。《　B　》、この教室全体で、彼に対する人見知りという仕打ちを止めたのであった。
秀美の気持は知らぬ間に浮き立ち、鉛筆を持つ手は震えた。

（『眠れる分度器』　山田詠美）

※1　アリバイを作り…ここでは周囲の生徒たちが、やり取りを見ていないということを表現するため、他の動作をしていること。
※2　怪訝そうな…不思議で納得のいかない

問一　――部①「披露（ひろう）」・③「愕然（がくぜん）」・④「黙認」・⑦「顚末（てんまつ）」について、本文中の意味としてふさわしいものをそれぞれ記号で選び答えなさい。

①　披露（ひろう）

ア　体が疲れること
イ　人を喜ばせること
ウ　見えないように隠すこと
エ　広く人に知らせること

③　愕然（がくぜん）

ア　非常に驚くさま
イ　冷静でいるさま
ウ　悲しむさま
エ　痛みを覚えるさま

④　黙認

ア　目を閉じて笑いを我慢すること
イ　メモを書き留めておくこと
ウ　知らないふりをして見逃すこと
エ　心の中で人をばかにすること

⑦ 顚末（てんまつ）

ア　一長一短

イ　一部始終

ウ　日進月歩

エ　四面楚歌

問二　――部②「二人のやり取り」は誰と誰のやり取りか、本文より抜き出して答えなさい。

問三　本文中の（1）と（2）に入るのに適切な語を、それぞれ本文中から漢字で抜き出して答えなさい。

問四　本文中の《A》・《B》に入る接続語をそれぞれ次から選び記号で答えなさい。

ア　では　　イ　つまり　　ウ　なぜなら　　エ　または　　オ　しかし

問五　――部⑤「そんなこと」とはどんなことか。もっともふさわしいものを選び記号で答えなさい。

ア　ひろ子が一番先に角度の問題を解いていたこと。

イ　三角定規と分度器を使って角度を教えていること。

ウ　三角定規と分度器を初めて手に取って見たこと。

エ　三角形の三つの角を足すと百八十度になること。

問六　――部⑥「とんでもないこと」とはどんなことか。その内容としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　鳥の餌ではなく、ひろ子が食べるためのパンだということを言い忘れたこと。
イ　恥ずかしいので、クラスのみんながいないところでパンをひろ子にあげたこと。
ウ　ひろ子のことが気にいらないから、わざと自分のパンをあげてしまったこと。
エ　自分の勝手な解釈で、ひろ子の気持ちも考えずにパンを差し出したこと。

問七　――部⑧「他の子たちが、おまえに、それを教えないことでどれだけ、赤間さんを助けていたことか。」と隆一郎が言った理由として、もっともふさわしいものを次から選び記号で答えなさい。

ア　秀美だけが赤間さんの家の事情を知らず、普通に接していることにより、彼女の心が救われたから。
イ　このクラスで秀美が赤間さんの家の事情を知らないことで、彼女はいじめられずにすんだから。
ウ　赤間さんはプライドが高いため、秀美よりは幸せな生活をしていると思うようにしていたから。
エ　他の子たちが、秀美が心配しないために赤間さんの家の事情を教えなかったことを知っていたから。

問八　【　X　】に入るのにもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　常に肉親が自分たちの話ばかりするからである。
イ　常に肉親が見守る範囲内で行動するからである。
ウ　常に肉親がいることでうんざりするからである。
エ　常に肉親が自分に何でもしてくれるからである。

問九　――部⑨「彼が話しかけてくるのは初めてのことだった」とあるが、これは、クラスの生徒が秀美に対して、どうしたことを（何を）表すか。解答欄に続くように、傍線部以前の本文中より十五字で抜き出しなさい。

問十　【　Y　】の前のたとえの文章を読み取り、本文中の内容として【　Y　】に入るのにもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　下駄箱ですれ違った級友の声だけで、自分以外の新しい標的を、クラスの中に見つけていることを知ったのだった。

イ　下駄箱ですれ違った級友の顔つきだけで、自分を取り巻くものが、今までと一緒であることを知ったのだった。

ウ　下駄箱ですれ違った級友の視線だけで、自分を取り巻くものが、それまでとは異なっていることを知ったのだった。

エ　下駄箱ですれ違った級友の匂いだけで、この場所から早く転校していきたいという気持ちを知ったのだった。

問十一　次の生徒A～Hの文章は、国語の時間中、クラスのグループ八人でこの作品の内容について話し合いをしたものです。本文の内容として**ふさわしいものを次から二つ選び**、記号で答えなさい。（解答は記号のみで答えること　例A）

生徒A　秀美に対する人見知りというクラスの行為は、彼が赤間さんに食べかけのパンをあげたことから起こったんだね。

生徒B　赤間さんが、秀美にパンを投げつけてにらんだのは、本当に彼が憎くてやった行動ではないと思うんだ。

生徒C　赤間さんは、秀美が、自分の家の事情をわかってしまった後、ずっと彼のことを許すことはなかったんだね。

生徒D　担任の奥村先生は、秀美と母親の仁子、そして祖父の隆一郎に対してこころよく思っていなかったようだね。

生徒E　仁子は、いつも学校で奥村先生を困らせようと問題を起こしている秀美に対して嫌気がさしているようね。

生徒F　秀美は、給食の時間になるとクラスでちやほやされている赤間さんを、面白く思っていなかったようだね。

生徒G　隆一郎は、自分勝手でいいかげんな秀美の行動を叱（しか）りつけ、深く反省させたことに喜びを感じていたんだね。

生徒H　秀美にとって隆一郎は、どんなときでも自分の心を素直に出せて、安心を与えてくれる存在なんだね。

次ページに問題が続きます。

二 次の詩を読み、後の問いに答えなさい。

いつもの長い夜

夕食をおえてから
母が丁寧に紅茶を淹(い)れる

そろいのティーカップと
バラの絵のティーポット

父が仕事先でもらってきた
どこか　外国のクッキーも
テーブルに　置かれていく

無口なまま
テレビを観ていたら
どこか　外国では大量にひとが死に
どこか　外国では教会が燃えていた

①ますます無口になって
紅茶を飲み干したら
その（　②　）を考える

③部屋に戻って辞書をひく
どこか　には
わたしと同じ中学生の
女の子もいるんだろう
④同じような制服を着た
同じような背丈（たけ）のひと

お向かいの犬が吠えている

夜の鳴き声は
夜を長くする

（『どこにでもあるケーキ』　三角みづ紀）

問一　この詩の種類としてあてはまるものを次から**全て**選び記号で答えなさい。

ア　文語詩　**イ**　口語詩　**ウ**　定型詩　**エ**　散文詩　**オ**　自由詩

問二　この詩に使われている表現技法を**全て**選び、記号で答えなさい。

ア　対句法　**イ**　省略法　**ウ**　直ゆ法　**エ**　体言止め　**オ**　呼びかけ

問三　1～7行目の情景に共通するもっともふさわしいものを次から選び記号で答えなさい。

ア　食後の美味しいおやつに期待し落ち着かない様子

イ　温かな食後のだんらんに当惑する様子

ウ　ひかえめで落ち着いた雰囲気を懐かしむ様子

エ　ゆとりのある穏やかな生活の安定した様子

問四　――部①「ますます無口になって」とあるが、その説明としてもっとも適切なものを次からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア　どれほど大きな出来事が起きていても、見ていることしかできない自分と世界の距離感に黙(だま)っている。

イ　家族との会話が弾(はず)まない上に、自分とは関係のないテレビの内容に、話すことはないと感じている。

ウ　なんとはなしにテレビを観てしまったという後悔から、何もいわずただ紅茶を飲みクッキーを食べている。

エ　なぜひどいことが起きるのか理解できず、投げやりな気持ちから言葉を発することも面倒(どう)に思っている。

問五　空らん（　②　）に当てはまる適切な語を、詩の中から探し抜き出して答えなさい。

問六　――部③「部屋に戻って辞書をひく」という「わたし」の動作が表しているものとしてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　家族だんらんの輪から離れ早く一人きりになって安心したいという気持ち

イ　外国語を習得するために学習に意欲的に取り組みたいという気持ち

ウ　家の中にいることしかできなくても、できる限り世界と関わりたいという気持ち

エ　理不尽な現実への強い怒りを覚え、その怒りを落ち着かせようとする気持ち

問七　――部④「同じような制服を着た　同じような背丈のひと」の表現からは、どのような気持ちが感じられますか。もっともふさわしいものを次から選び記号で答えなさい。

ア　親近感　　イ　安定感　　ウ　違和感　　エ　正義感

問八　この詩を読み生徒四人が感想を述べあった。詩の内容と**異なること**を話している生徒をひとり選び、記号で答えなさい。

生徒A　世界に目を向けた時、中学生の「わたし」が無力さを感じながら、いつも通りの生活を送る姿がわかるね。「わたし」の素直な戸惑いがよく伝わってくるよ。

生徒B　身近にあるものが詩の中に多く登場することで、中学生の「わたし」がどんな生活をしているのかすぐに思い浮かべられるよ。活発に過ごす「わたし」が、外国のニュースを見て気持ちを引き締めているね。

生徒C　静かで長い夜に、「わたし」は答えの出ない思いを抱えて、犬の声を聴いていると思うな。誰もが平和で穏やかに生きているわけではない現実を突きつけられ、悲哀を感じる詩になっていると思う。

生徒D　昼間と違って、夜に響く犬の声は、「わたし」を小さくいら立たせていると思う。犬の声が気になり始め眠れない繊細な「わたし」は、テレビでみた外国のニュースを思い出し、長い夜を過ごしているね。

三 **次の俳句を読んで後の問いに答えなさい。**

A　肩に来て人懐(なつ)かしや赤蜻蛉(とんぼ)　夏目漱石

B　名月や池をめぐりて夜もすがら　松尾芭蕉

C　うつくしや障子の穴の天の川　小林一茶

D　一点の偽(いつわ)りもなく青田あり　山口誓子

問一　A～Dの俳句の中に一つだけ他と季節と異なる句があります。その句を記号で答え、季節を漢字一字で答えなさい。

問二　切れ字の使われてない句が一つあります、記号で答えなさい。

問三　Aの句で使われている表現技法としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　比ゆ法　**イ**　擬人法　**ウ**　倒置法　**エ**　体言止め

問四　次の評にあてはまる句を選び、記号で答えなさい。

①　その季節特有の自然の美しさに時を忘れる作者の姿を描いている。

②　ささやかな風景が作者の記憶(おく)を掘(ほ)り起こさせる瞬間を描いている。

四 次の□に入る共通の語を漢字一字で答えなさい。

①□が利く　□を出す　□をつぶす

②□がつく　□が早い　□を運ぶ

五 次の①～③の意味にあたることわざを次から選び記号で答えなさい。

① おかしくてたまらないこと

② 大きな決断を下すこと

③ 実際より価値があるように思われること

ア　九死に一生を得る

イ　犬が西向きゃ尾は東

ウ　やぶから棒

エ　清水の舞台から飛び降りる

オ　逃がした魚は大きい

カ　旅は道連れ世は情け

キ　三日見ぬ間の桜

ク　へそで茶をわかす

六 次の―部の漢字の読みを答えなさい。

① 作家に**着目**し図書館で調べ学習をした。

② 目当てのものが見つけられず**徒労**におわった。

③ **上**の空で過ごす。

④ **盛大**にお祝いをした。

⑤ メンバーを**刷新**して大会にのぞむ。

七 次の―部のカタカナを漢字で答えなさい。

① 傷ついた土地の**フッコウ**を目指す。

② **イチジル**しい赤ちゃんの成長。

③ 最近は敬語の**ゴヨウ**が多い。

④ **テサ**げ袋を持って買い物に行こう。

⑤ 方位**ジシン**で東の方角を目指す。